

九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2025



所 属： 人文学部心理臨床学科

名 前： 和田 由美子

九州ルーテル学院大学 ティーチングポートフォリオ

作成日：2025 年 4 月 29 日

教員氏名：和田 由美子

所属：人文学部 心理臨床学科

1. はじめに

ティーチング・ポートフォリオとは、自らの教育活動を主体的に振り返り、言葉で再構築し、シラバスや教材、学生アンケートなどの多様なエビデンスで成果を裏付けてまとめた「成長の履歴」である（栗田，2009）。九州ルーテル学院大学では 2020 年度から専任教員にポートフォリオの作成・更新が義務づけられており、今回の更新では 2022 年度から 2024 年度にかけての自分の教育実践の振り返りを行った。

2020 年度は、新型コロナウイルスの影響で急遽オンライン授業に移行し、学習環境や教材整備に試行錯誤を重ねた期間であった。2021～2022 年度には、感染状況に応じてオンラインと対面を組み合わせるハイブリッド授業を実践しながら、効果的な授業設計のあり方を模索した。ほぼ全面対面に戻った 2023 年度以降は、学生の日常生活が復活する一方で、オンライン経験を経た学生たちの学びへの期待が大きく変化した。単なる知識伝達はオンラインで十分と考える声が増え、対面授業には討論や実践的活動、学生間交流といった新たな価値提供が強く求められている。このような変化を受け、教育の質をどのように高めていけばよいのか。過去 3 年の自身の教育実践を振り返ることで課題を整理し、今後の教育改善につなげたい。

2. 教育の責任

私の専門分野は基礎心理学であり、心理学の基礎科目を中心に心理臨床学科の専門教育科目を担当している。大学院人文学研究科で心理学研究法の授業を担当している。その他、学部心理臨床学科のアドバイザーとして学生の各種相談に応じている。認定心理士（一般社団法人日本心理学認定）の資格取得の指導のほか、2024 年度からは、学生の心理学の知識定着を目指して心理学検定（一般社団法人日本心理学諸学会連合認定）の学内団体受付を開始し、1 月に課外での心理学検定対策講座を実施した（5 コマ中 3 コマ担当）。2021 年度からは臨床心理系の教員と共同して課外での心理系大学院受験対策講座（毎年 5 月末、2 月末に実施）、2024 年度からは公認心理師国家試験対策講座（2 月実施）の一部を担当している。

(1) 授業科目の担当

2022 年～2024 年度の 3 年間の担当科目は以下のとおりである。

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
フレッシュマン・ゼミ	2022 年度前期	29 名	

心理臨床学の基礎	2023 年度前期	約 60 名	
心理臨床学の展開	2023-24 年度後期	約 60 名	
心理学概論	2022-24 年度前期	約 60 名	
学習・言語心理学	2022-24 年度前期	44-68 名	
神経・生理心理学	2022-24 年度前期	37-69 名	旧：神経・生理心理学 I
心理学研究法	2022-24 年度後期	41-64 名	
心理学実験	2022-24 年度後期	39-52 名	2023-24 は 2 班で実施
心理学外書講読Ⅱ	2022-24 年度後期	14-32 名	
心理学研究演習	2022-24 年度前期	7-15 名	2023-24 は 2 班で実施
特別研究	2022-24 年度後期	6-8 名	
卒業研究	2022-24 年度通年	6-9 名	
心理学研究法（大学院）	2022-24 年度前期	5 名	

■ 主要授業科目

「心理学概論」

心理臨床学科 1 年次の必修科目であり、公認心理師および精神保健福祉士の受験資格取得に必要な指定科目でもある。感覚と知覚、学習と記憶といった基礎的な心理過程の理解は、心の健康増進や心理的アセスメント、支援活動の土台をなす重要な要素である。本講義では心理学の基礎から応用までを広く概観しつつ、人間の心の働きを体系的に学ぶとともに、これらの学修を通じて、自己と他者を客観的に観察する力を養い、人間理解を一層深めること目的としている。心理的支援に関する単元（2 回分）については、専門性の観点から、公認心理師・臨床心理士の石坂昌子准教授に講義をお願いしている。

「特別研究」

卒業研究に向けて必要なジェネリック・スキルを身につけるため、心理臨床学科 3 年次でこの科目を必修としている。少人数の演習形式で、まず興味のある心理学研究論文を読んで複数回発表し、そこから卒業研究のテーマを絞り込む。論文や関連テーマについてのディスカッションを通じて、批判的かつ真摯に研究に向き合う姿勢を養うとともに、人を対象とする研究に必要な倫理的配慮についても学んでいる。さらに、Google フォームを使ったウェブ調査や、Google Sites によるウェブページ作成を実践し、研究に役立つウェブアプリケーションの操作方法も習得している。

「卒業研究」

心理臨床学科 4 年次の必修科目であり、4 年間の学びを総括する位置づけにある。心理学の研究法を身につけるには、以下の一連のプロセスを主体的に経験することが重要である。まず、自らリサーチクエスチョンを設定し、文献調査を行ったうえで実行可能な研究計画を立案し、次に、データの取得と分析を経て結果を整理して、リサーチクエスチョンに基づいた考察を行う。本科目では、学生がこの全工程を自ら実践し、得られたデータを分析して問いに答える研究を強く推奨している。加えて、研究成果を他者にわかりやすく伝えるためのプレゼンテーション技法の習得にも力を入れ、指導を行っている。

学部での教育以外の教育実践は以下のようなものがある。

■ 模擬講義

「勉強に役立つ心理学」

熊本西高校アカデミックインターンシップ (NAIS) に参加した高校 1 年生を対象に、先延ばしを防ぐ具体的な方法をわかりやすく解説した。

(2023 年 8 月 28 日、8 月 30 日 於：九州ルーテル学院大学)

「心と行動の個人差はなぜ生じるのか」

九州ルーテル学院大学オープンキャンパスの参加者に対し、性格の違いを説明するために、「認知スタイルの違い」と「脳の覚醒状態の違い」という二つの視点を用いる考え方を紹介した。(2024 年 8 月 24 日 於：九州ルーテル学院大学)

■ 非常勤講師

「比較心理学」(～2024 年度)

福岡県立大学人間社会学部人間形成学科において前期集中講義を担当している。比較心理学は、ヒトを含む様々な動物種の行動とその背景に存在する心的過程(感情、知覚、学習、認知等)を観察・比較することによって、各動物種における心と行動の独自性と共通性が「なぜ」生まれたのかを解明しようとする学問である。本講義では、進化論と遺伝学の基礎について概説した後、様々な動物種の心と行動を比較し、主に進化的観点からの解説を試みている。

(2) 教育組織運営

担当教員として授業運営および学習指導に従事するとともに、2022 年度入学生(現 4 年次)のアドバイザーとして履修相談や進路相談をはじめとする学生の各種相談に随時対応している。2022～2023 年度には心理臨床学科長として、教員および事務組織との連絡調整を通じて学科教育の円滑な実施に努めた。2024 年度からは、副学長(教務)および教務委員長として教務課と連携し、教育関係業務の調整や関連規程の整備を進めることで、教育実践環境の整備に努めている。また、外部講師を招いて学内 FD・SD 研修会を企画・実施し、全学的な視点から教育改善を推進している。

3. 教育の理念

私が専門とする基礎心理学では、人間の心と行動のメカニズムを科学的に解明することを目的としている。人間の行動原理についての基本的な基礎的な知識や考え方を学ぶことにより、人間や社会を多角的な視点で理解し、幅広い視野で課題に取り組む力が身につく。また、基礎心理学の研究体験を通じて、「データや行動を丁寧に記録し、事実を正しく把握する姿勢」、「結果をそのまま受け入れず、多角的に検討する習慣」、「日常の疑問を深めようとする意欲・好奇心」が身につく。これらは、日常生活、社会生活を送る上で必要とされる「ジェネリック・スキル」でもあり、大学 4 年間の心理学教育・研究活動を通じて、学生がこれらのスキルをしっかり伸ばしてい

けるようサポートしている。

(1)理念1 既存の知識の体系的な理解

科学的に人の心と行動を解明するには、まず先行研究を俯瞰し、その成果と限界を正確に把握することが出発点となる。Google Scholar の「巨人の肩の上に立つ」という言葉にあるように、既存の知見を土台に未解明の課題を洗い出して初めて、新たな発見が可能になる。そのためには、心理学の基礎理論だけでなく、神経科学や統計学などの関連分野の基礎知識の修得も欠かせない。既存の知識の修得は退屈に思えるかもしれないが、ここをおろそかにすると後の学修や研究活動に支障をきたす。

(2)理念2 新たな知を産み出すための方法論の理解と実践

大学での学びの醍醐味は、自ら新たな知を生む研究活動に携われる点にある。とくに心理学では、実験法、質問紙調査法、観察法、面接法といった多様な方法論に基づいて心理・行動データを収集し、統計学的手法で分析する技術を修得できる。また、先入観や価値判断をいったん脇に置き、データを多角的に吟味する科学的な姿勢は、大学卒業後の日常生活や社会活動においても大いに役立つと考えられる。

(3)理念3 未知の領域に挑戦しようとする探究的態度の涵養

未知の現象を「知りたい」「理解したい」という知的好奇心は、研究のみならず、大学卒業後の日常生活や社会活動を牽引する原動力になる。そのため、人間の心と行動に関する学生の素朴な「なぜ」「どうして」という疑問を大切にし、一見学術的ではないように見えるテーマについても心理学的視点で掘り下げてみることを推奨し、多面的・多角的な探究心を育成している。

4. 教育の方法

教育理念との関係では以下の点を重視した教育方法を取っている。

(1) 知識教授型授業による既存知識の効率的な修得

近年、詰め込み型授業の問題点が指摘され、グループワークやディベートを導入した主体的な学びが推奨されている。一方、当該領域に関する一定の体系的知識がない段階では、主体的な学びが困難であることも事実である。そのため「神経・生理心理学」に代表される知識修得型の科目では、では、必要な知識の修得に重点を置き、毎回授業後に復習問題を課すことで知識の定着を図っている。さらに、小テストやフィードバックを通じて理解度を確認し、つまづきを早期に解消するよう心がけている。

(2) 体験的・実践的な学び

研究の方法論を理解するには、まず自分でデータ収集と分析に取り組んでみる事が大切である。「心理学実験」「心理学研究法」で基本的な方法論について学習した後は、「心理学研究演

習」や「特別研究」などの実習・演習系の授業を通じて、「卒業研究」の前に学生が自ら研究実践を積む機会を設けている。

(3) 研究テーマの自由な選択

本ゼミでは、大学院進学を希望しない学生が大半を占めるため、卒業研究は彼らにとって最初で最後の研究機会となる。そこで教員の専門領域にとらわれず、学生自身が心から興味を抱くテーマ選びを最優先にしている。心理学分野では、自らの思い入れが強いテーマに取り組むことが、研究スキルの習得に特に効果的だと考えている。

5. 教育改善のための努力

(1)改善努力1 「心理学研究法」授業評価アンケートより

2023 年度の「心理学研究法」の授業評価では、「教員から意見を求められたり、質疑応答の機会があった」で平均値（4.2）を下回る評価(4.0)を得た。授業中や授業後 Google フォームや Moodle を用いて質問を受け付けて回答してはいたが、学生からあまり質問が出なかったため、2024 年度はペアワークによる意見交換など、アクティブ・ラーニングの時間を増やすように心がけた。その結果、2024 年度の同項目の評価は 4.5(平均値 4.3)に向上した。

(2)改善努力2 「神経・生理心理学」授業評価アンケートより

2023 年度の「神経・生理心理学」の授業評価の自由記述で「みんながわからないのか、自分だけがわからないのかがわからないので質問しづらかった」「スライドの文字が多い」「グループ活動を取り入れてほしい」等の意見・要望があった。これらを受けて、2024 年度は質問入力時間を長めにとった結果、「教員から意見を求められたり、質疑応答の機会があった」の評価が 3.8 から 4.1（平均値 4.4）に向上した。評価まだ平均値を下回っているため、引き続き改善努力が必要である。また、「グループ活動を取り入れてほしい」との要望を受け、2024 年度はグループワーク中心の授業回を設けた結果、「グループワークやディスカッションの機会があった」の評価が 2.5 から 4.3（平均 4.2）に向上した。スライドの文字数の多さについては、少しずつ改善に努めている。

6. 教育の成果・評価

直近の 2024 年度の授業評価を見ると、一部科目（心理学概論、学習・言語心理学、心理学研究法）で平均を上回る評価、その他の科目でも概ね平均的な評価を得られていることから、授業については一定の水準を満たしているものと考えている。授業評価において平均値を下回ることが多い項目として、「教員から意見を求められたり、質疑応答の機会があった」「グループワークやディスカッションの機会があった」の2項目があげられる。質疑応答の時間は設けているがなかなか質問が出にくいので、時々「グループワークやディスカッションの機会」を設けて、質問しやすい授業の雰囲気をつくっていく必要を感じている。

卒業研究については、例年ゼミ生の半数程度が、ほぼ自力で研究計画立案、データ収集、結果の分析を行うことができおり、2年次の「心理学実験」「心理学研究法」、3年次の「心理学研

究演習」「特別研究」での教育の成果を実感している。

7. 今後の教育に関する課題と目標

コロナ禍以降、対面授業に対する学生のニーズが変化し、特にグループワークやディスカッションなどの対話的な学びを求める声が強くなっている。授業評価アンケートからもその傾向が読み取れるが、グループワークに時間を割くと、国家資格に対応した必須知識の講義時間が不足するという課題が生じる。この課題に対応するため、知識習得に関する講義部分は事前にオンラインで学習してもらい、対面授業ではグループワークを中心に展開する「反転授業」の導入が必要だと感じている。また、AI 技術の急速な進化を受け、アクティブラーニングへの AI 活用の必要性も感じている。AI を単なる答えを得るための道具として使うのではなく、学びを深めるための支援ツールとして、適切な活用方法を模索しながら、授業への段階的な導入を進めていきたいと考えている。

【根拠資料】

- ・ 心理学研究法 2023 授業評価.pdf
- ・ 心理学研究法 2024 授業評価.pdf
- ・ 神経・生理心理学 2023 授業評価.pdf
- ・ 神経・生理心理学 2024 授業評価.pdf